

外国人陸上競技選手における日本語の役割語についての研究

日本語学ゼミナール 1313060 松内 幸四郎

1. 研究動機・研究目的

外国人選手が発言した言葉がテレビでしばしば放送される。その言葉を、日本語に翻訳したものが字幕として映し出される。その字幕文字は、私たちにとって身近なものとなっている。多くの方は、映し出された字幕に対して何か問題を感じ、理解に苦しむことなくごく自然な日本語として受け入れられているに違いない。

例えば、ウサイン・ボルトの言葉はロンドンオリンピックのレース後の会見で次のように翻訳された。「悪い時代にやってきたな。あと2、3年はオレの時代さ。」この時、私たちは何の違和感もなく、ボルトらしい力強いというイメージを思い浮かべながらコメントの翻訳を見ただろう。ここで、「オレの時代さ。」というフレーズに注目したい。「わたしの時代です」や「ぼくの時代だ」と翻訳してもいいはずなのに「オレの時代さ。」と訳している。英語での一人称“I”の翻訳になぜ「ぼく」や「わたし」もしくは「自分」の選択肢からではなく「オレ」を使っているのか。また、語尾もなぜ「です」「ます」という丁寧語を使わず、終助詞「さ」を使っているのか。いかにもボルトらしいというイメージを持つことができるが、そもそも、私たちは日常会話の中で語尾に「～さ」とつけて会話をする人と会ったことはあるだろうか。おそらくないだろう。つまり、ボルトの発言が現実の日本語に存在しない表現で訳されているのだということが推測できる。それにもかかわらず、私たちはボルトらしい日本語として日本語訳を無意識のうちに違和感なく受け入れ、ボルトのイメージを思い浮かべている。ボルトに使われている独特な日本語表現はいったい何なのか疑問が残った。

この疑問を「役割語」という概念を用いて考えることとした。役割語というのは、あるキャラクターを人々に思い起こさせるような特定の言葉づかいのことである。卒業論文では、スポーツ選手の言葉の翻訳を役割語という概念から分析し、そこから私たちがスポーツ選手にどのようなイメージを持っているか、つまり、スポーツ選手のキャラクターをどのように作っているかを明らかにすることを研究目的とした。

2. 研究方法

本研究は対象をスポーツ選手の外国語での発言に絞る。さらに、スポーツの種目はテレビや新聞での露出が多く、役割語が多く使われている陸上競技とする。

まず、陸上選手が発言した言葉を集める。集める手段として動画配信サイト「YouTube」の日本語字幕、朝日新聞デジタル版「聞蔵Ⅱ」を使用する。次に、集めた例を選手の性別、人種、現役中、引退後に分類し、それを新たに様々な観点で役割語を比較していく。それぞれの役割語の例文から明らかになったことをカテゴリー別に分け、スポーツ選手に対してのステレオタイプを述べていく。

3. 主な結果と考察

本研究で次のことがわかった。まず、黒人選手に一人称として「オレ」がよく用いられる。「オレ」は、強さや男らしさという記号が付加され、野性的で強い身体能力を備えた男子＝ヒーローに用いられる傾向がある。つまり、私たちは黒人陸上競技選手に、強い肉体を持ち、常にトップに君臨しているヒーロー的な存在であり、野性的でどこか親近感もあるという先入観、つまりステレオタイプを持っているということになる。さらに、ある選手の言葉の翻訳において、一人称が突然「オレ」から「わたし」に変化するという事例を新たに発見した。その事例から、なぜ変化したのか、変化する条件はどのような点にあったのかについて考察した結果、世間から疑惑の目を向けられた選手は一人称に「わたし」が使用されている傾向があるということがわかった。その背景に、疑惑をかけられた選手はしおらしくするべきだ、という世間からの思いがあるのだろう。

また、終助詞「さ」「ぜ」について、実際にそれぞれの例を挙げて歴史や終助詞「さ」「ぜ」に与えられているキャラクター像について考察をした。終助詞「さ」や「ぜ」については、普段の私たちの会話の中で実際に使用している人は、おそらくいない。それにもかかわらず、外国人選手の言葉の翻訳にはしばしば用いられている。つまり、これは、役割語である。「さ」や「ぜ」を用いることによって、それぞれが終助詞の機能からアウトローで攻撃的なキャラクター像を作りあげられているのだということがわかった。

4. 結論

冒頭で挙げたボルトの発言自体は英語であり、翻訳の日本語は現実に用いられた日本語ではないヴァーチャルな日本語である。その日本語の言葉づかいが、いかにもボルトらしいものと感じられる翻訳だとすれば、翻訳の日本語も「役割語」と言えるのではないだろうか。そして役割語は我々の持っているステレオタイプと関係していると改めて確認できる。また、終助詞「さ」「ぜ」においても、実際に使用しないヴァーチャルな日本語であるという点から、「さ」「ぜ」は役割語の世界でのみ使用されていることがわかった。

5. 卒業論文の執筆を終えて

卒業論文の研究を進める中で、初めはぼんやりと「役割語」に興味があるという気持ちだった。興味があるだけで研究を進めていくのが苦ではなかったが、面白いという気持ちになれなかった。しかし中間発表を終えて、さらに深く研究を行っているうちに新たな発見をした。それは「同じ人物でも一人称の変化が生まれる」ということだ。今まで研究がされていないことを発見でき、次第に研究が楽しく面白いという気持ちになった。なにより、学びたいという気持ちになれた。その気持ちの変化が卒業論文の作成において大きな力となったと思う。卒業論文の作成でしか学べない経験ができたことに感謝したい。また、卒業論文から何事においても、自ら学びたいという気持ちがなければ学びは進まないということ、改めて実感した。はじめは卒業論文を書くという作業が途方もなく大変なものだと思っていたが終えてみると、自分の糧になることばかりだった。